

分科会 H [自由] 社会

報告 1 劉曼怡 (一橋大学大学院社会学研究科博士後期課程)

テーマ「中国におけるアイドルファンとインターネットナショナリズム」

2019年に香港で起きた「反送中」運動に対し、中国大陸の人々の間ではデモ参加者への批判的感情が高まった。その中でも、特に「ファン女子」(飯圈女孩)たちの言動が注目された。彼女らがInstagram、FacebookなどのSNSで愛国を表現する内容を大量に書き込んだ組織的な行動は、中国大陸の主流メディアで取り上げられ、高く評価された。しかし、なぜアイドルファンは政治問題と結びついたのか、ということを考えたい。中国においては、インターネットナショナリズム(ネットワーク民族主義)を分析する時、サブカルチャーとしての見方が強かったアイドルファンへの認識はまだ十分とは言えない。

中国におけるインターネットナショナリズムの発展の流れからみると、2010年頃、中国国内におけ「嫌韓感情」が高まった時期には、「韓流アイドルを守る」ファンは、「愛国心がない」と見なされていた。しかし、2016年、THAAD配置に伴って中韓関係がまた緊張していた時期に、アイドルファンは「アイドルよりも国家が優先」(國家面前無愛豆)というスローガンを掲げた。そして、2019年の香港デモに反対する行動の中、アイドルファンが、中国のことを男性アイドルのようにイメージし、「中国お兄ちゃん」(阿中哥)と名付けた。中国のファンカルチャーは、韓国からの影響が大きい。韓流アイドルのファンは、もともと「ファンがアイドルを育成していく」という意識が強いと見られる。中国のファンも例外ではない。国家のことをアイドルにたとえてきたのは、ファンは、マネージャー・経営者としての意識を国家のイメージメイキングに生かしていると言えるであろう。しかし、なぜこのような変化が起きたのであろうか。

本報告では、中国におけるインターネット史上の大きな出来事を整理しながら、アイドルファンがそれらの中に占めてきた位置づけを明らかにし、アイドルファンとインターネットナショナリズムがどのような経緯でつながってきたのかを明らかにする。

報告 2 村上志保 (明治学院大学)

テーマ「中国プロテスタント教会をめぐる 2000 年代以降のグローバル化の動向と影響」

共産党政権下の中国において宗教は国家の管理対象であり、その管理は、宗教に関わる諸要素(組織、聖職者、信者、活動場所)を国家という枠組みの内部に固定し、国外との交流を遮断することを前提とする宗教政策に基づいて行われてきた。しかし経済発展に伴い宗教を含む社会全体に対するグローバル化の影響は避けられず、宗教に関わる人々のトランスナショナルな移動および交流は 2000 年代以降急速に拡大してきた。習近平現政権以降宗教に対する規制や取り締まりは急激に強められてきたが、一方で中国の国際政治経済における急速な発展・勢力拡大によって人々が国境を越える機会の増加は継続しており、宗教状況にも大きな変化をもたらしている。これらの状況に鑑み、本発表では 21 世紀以降さらなる展開と拡大を見せる中国を取り巻くグローバル化が、中国国内における宗教状況にい

かなる変化と機会を与えているのかという問いに基づき議論を行う。

共産党政権下の中国における宗教状況をめぐっては、主に国内における政教関係を軸に研究が進められてきたが、2000年代以降急速に進展するグローバルな影響の拡大・多層化は、中国の宗教に影響を与える新たな要素としてますます注目されるようになってきている。本発表ではまず中国宗教をめぐるグローバル化の進展をめぐる近年の研究の動向について概観したうえで、特にプロテスタントにおける状況を対象として考察を進める。具体的には海外に在住するあるいは海外から帰国した中国人信者、中国国内の諸教会における国際化、共通する言語と文化的背景をもつ華人クリスチャンというルートの利用とネットワーク形成をめぐる動向に基づき議論を進める。最後にまとめとして、都市部を中心に進展する国際化やグローバル化が、「宗教中国化」の旗印のもとでナショナリズムと宗教管理が強まる国内状況にいかなる影響を及ぼしているのかを検討する。

報告3 磯部美里（国際ファッション専門職大学）

テーマ「双版纳タイ族のタイ医学における治療とケアの実践－刮痧の事例を中心に－」

刮痧（かっさ）は「気血の流れを整え老廃物を排出し、身体機能の活性化を図ることにより人が本来持っている自然治癒力を高める自然療法」（雲瑤著『全息経絡刮痧療法』柏艚舎、2009年、10頁）である。前漢時代に編纂された中国最古の医学書と言われる『黄帝内経』に記されている、石で身体を刺激する砭石療法や鍼を用いる刺絡療法が変化した中医学の民間療法である。このような民間療法は漢民族だけではなく、周辺の少数民族地域、ひいては日本を含む海外へも伝わり現代へ至っている（磯部美里「刮痧」から見る中国の伝統医療：非漢族地域での継承と展開」第69回日本現代中国学会全国学術大会自由論題報告、2019年）。

本報告が事例とする双版纳タイ族自治州に居住するタイ族（Tai Lue）の人びとにおいては、刮痧は「フッサー」と呼ばれ、めまい、頭痛、喉の痛み、肩こり、風邪、車酔い、熱中症などの症状に対処するものとして日常的に利用されている。タイ医学の医学書には治療法としてまとめられてはいないが、当地の村落内で治療を行うタイ医学の民族医への聞き取り調査によれば、実際の治療では用いないものの刮痧は「タイ医学」に含まれるという。また、タイ族の人びともこれを「タイ医学」であるとみなしている。つまり、刮痧は中医学の民間療法でありながらすでに当地に根付き、自分たちでできる不調の解消手段として利用され、多くの場合、それは妻から夫、母から子など、女性から家族へと行われている。

本報告においては、このような当地の傷病人の身体管理に関わる人びとの営みや関係性に注目し、「人間としての基本的な態度であり、子育てや病人の世話、高齢者の介護という日常生活の文脈で研究」（浮ヶ谷幸代編「苦悩とケアの人類学」世界思想社、2015年、9頁）されてきた配慮・気遣い・世話を意味する「ケア」の視点から刮痧実践について考察を行う。本報告を通して、このようなケアもまた民族医学における広義の治療実践に含まれること

を指摘したい。